

## 猪 8 空想の猪 = = = 猪・鹿・狸より



かつてある若い女房が、朝まだ仄暗いうちに、村のアイチ（相知）の入の山へ、苧干の草を背負いに行くと、路の行手へ灰色した子豚ほどの獣が現れて、前に立ってころころ歩いて行ったと言う。その時獣の方では、後から人間の来ることなどは、一向感づかぬらしかった。女房も気丈者で、平気で後を随いて、ものの三町も行ったが、そのうち獣は脇の草叢へ外れてしまった。家へ帰ってその話をすると、老人からそれこそ猪だと聞かされが、実はびっくりするかと思いのほか、あんなものが猪かと、案外な顔つきをしたそうである。

話に聞いたばかりでなく、現に田圃の稲を踏みにじったり、ノタを打ち、蚯蚓を掘った跡を見て、実際の姿を想像していた者が、ひとたび自然そのままを見た場合には、この女房と同じもの足りなさを感じたのである。まことにあんなものが猪だったのである。

自分らの経験でも、猪は恐ろしいもの、強い獣と、物心つく時から聴いていた。それがあつた時屋敷の奥の窪から、狩人に昇がれてゆく姿を初めて見たときは、同じ幻滅を感じたものであつた。それがまた一方には、まるで別の猪の世界を想像していたのだから不思議である。どうしても実感の方が押えられがちであつた。

幼少の頃、八名郡宇里の山里から来た柚が、家に泊まっていたことがある。五五、六のごく実直らしい、話好きの男だつた。妙なことにその男の話が、いつも狩りや獣のことばかりであつた。日数が経って初めて判つたのだが、前身が狩人だつたのである。どうしてヨキ（斧）を持つようになったか聞きもせななんだが、およそ一ヶ月ほどの間に、数限りなく狩りの話や獣の話をしてくれた。そのうち未だに忘れられぬほどの感動を与えられたのは、猪と鹿の比較談であつた。山のタワなど遁げてゆく鹿を狙って撃つた時、うまく急所に当たると、文字通り屏風を倒す如く転がって、何とも言われぬ快哉であるが、猪の方だとそうは参らなかつた。いかに急所を撃たれても、決して鹿のような倒れ方はせななんだ。弾丸を受けてからもなお二、三步肢を運んで、静かに前屈みにつくばい込むと言うのである。その話を聞いていると、いかにも剛勇の最後を見るようで、猪の猪らしい態度が、名実ともに適つた如く感じられたものである。

あるいはまた恐ろしい手負猪の話であつた。これにかかつたが最後命はないと聴かされて、牙を剥いた物凄姿を胸に描いてみた。その恐ろしい手負猪を、

傍らへ引き寄せてからうまくひき外して、後の谷へまっさかさまに突っこかしたという村の某の逸話を、いつまでも信じていて、幾度か人にも話したものであった。

そうかと思うと、劇しい追狩の最中に、遁げながらも幾度か引き返して獵犬を追い捲るという話を、恍惚として聴き入ったものである。幾度聞いてもあかぬ興味を覚えたが、そのたびに空想の世界が、だんだん根を張って伸びてしまったのである。



若い猪や雌の猪は、確かに、こんなものが猪かと思いますが・・・・。  
成獣の雄猪は、迫力ありますよ。。孝太郎さん・・・・。